
身代わりの娘

クロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

身代わりの娘

【Nコード】

N2489U

【作者名】

クロネコ

【あらすじ】

娘の存在価値は、身代わり。ただ1人のあらゆる 危険から守る為 生かされている 身代わりだ。それ以外は、何も 彼女に意味がないから。同じ日に生まれたにもかかわらず 運命を違えた 身代わりにされた 娘の物語。

『魔』とは、闇（黒）を纏う者のこと。1つでも、それらを纏っているならば、その者は、異形である。形成される魔力も規格外であり、普通の方法では、死に至らしめることが出来ない。なぜなら、身に纏う『魔』によって、守られているから。彼らを倒すには、大いなる意思と力が必要不可欠だ。自身の揺るがない意思と絶対なる力。それらが、重なり合うことで『魔』をも、突き破る強大なモノになる。

魔女とは、男を魅了し、新たな『魔』を生んだり、全てを破滅させる存在。歴史上に名を馳せる傾国と呼ばれる美女達は、ほとんど魔女だ。

魔術師とは、狂気の象徴であり、人の命を弄ぶ。魔女とは、意見が合えば手を組むこともあるが、ほとんどは、単独で行動することが常。中には、『魔』に堕ちることなく、自分の意思を持つ者もいるが、ほとんどが、人を浚い、自由に扱う。

世界は、魔女と魔術師によって、壊滅的なダメージを受けた。なぜなら、国の要である帝国が、たった1人の魔女に落ちてしまったから。人々は、絶望した。世界が、終わってしまう……と。このままでは、何もかもが、終わってしまうのは、赤子でもわかることだ。どうすれば、世界は、この危機を乗り越えることが出来るのだろうか？魔女は、他の魔女と魔術師は、圧倒的な力で、世界を弄ぶ。

魔女は、玩具で遊ぶかのように、人々の心を操る。

魔術師は、実験するかのように、国を壊していく。

『魔』は、人々から希望を奪って、絶望の果てへと突き落とした。

けれど 光は、闇の中でも 輝きを失わない。灯りを点す 人々の心が、少しでもあれば 光は、再び 希望に満ちるのだから。

『魔』が 恐れているのは、いつの時代でも 這い上がってくる者が、徹底的に 痛めつけても 執念を燃やしてくる者。だからこそ 心が、完全に折れるように 『魔』は、標的ではなく 周囲の者達を襲うのだ。

大切な者を、守ろうとする 心の強さに 気付かずに…………。

※〵※〵※〵

女は、血を吐きながら ニヤリと 笑っていた。そんな彼女の様子に 誰もが、蒼ざめる。女は、そんな反応を見回して 目的の人物に視線を注いだ。

「小さき王子：：：妾^{わらわ}は、目的を果たしますわ。どんな手段を使っても。この国を絶望に突き落としてあげますわ？」

だって 妾^{わらわ}は、魔女なのですから。魔女は、自分の欲を満たす為には、手段を選ばない。たとえそれが、肉親を散らせることになってもね？」

その声は、渴き切っているにもかかわらず その場に 響き渡る。誰もが、身動きできない。少しでも 動いてしまえば 呪われる と思っているかのよう。ただ 女の前にいる 美丈夫な男だけが、違った。彼は、手にしている 剣を振り上げ 女の体を貫く。女は、短い呻き声を上げながらも 笑みだけは、崩さなかった。そして その身は、跡形もなく 散っていく。

「……終わったのでしょうか？」

1人の騎士が、恐る恐る 呟いた。その声に 他の者達も、不安の色を隠せていない。

「終わったのですよ 全て。あの魔女は、死んだ。よって 国は、救われたのです」

男の隣に控えている 簡素なワンピースを着た 女が、散っていく 魔女をにらみながら 答えた。

その声に 騎士達は、雄たけびを上げる。離れた場所からは、女達の泣き叫ぶ声が。みんな 喜びをがち合っている。

長く続いた 『破滅の魔女』との戦いは、ここに 終止符を打つ。いくつもの国を、陥れ その魔女は、堕としてきた。かつては、全ての国々を支配していた 帝国さえも、簡単に 滅亡にへと追い込んでしまった 狂気の魔女だ。その美貌を持って 多くの王族や貴族が、心を乱され 国は、消えていった。

この場が集まったのは、皆 破滅させられた 国の平民から貴族に王族達。その中心に立っているのも、幸せだった 時間を魔女に奪われた 王の子。彼を残し 他は、みんな 魔女の狂気により 命を落としてしまっている。

「やっと これで 父上と母上……姉上の敵を討つことが出来た。あの憎き魔女を、やっと 倒すことが、出来たんだ」

「何よりです……王子。我らも、これで 安らかな夜を迎えることが出来る。闇を恐れずに」

皆 涙を流した。

「王子……我らは、貴方こそ この国の王になられるべきだと思っております。どうか 国を復興させましょう。民は、皆 貴方様に従います」

騎士達は、膝を立て 忠誠を誓う 姿勢をする。この戦いに参加した 他の仲間達も、慌てて 同じ姿勢をした。

その後 国は、少しずつ 復興していき 世界は、安定していった。滅んだ 国々も、助け合いながら……。けれど 誰も、知らなかった。狂気の種が、魔女の散る時 残されていたことにも、気づかずに……。

光の誕生

帝国 グランティアは、魔術に長けた 国。かつては、暗黒の魔女・魔術師に恐怖する 夜の世界は、続いていたが 英雄王 ディアスの活躍により 暗黒の魔女と魔術師は、滅んだ。

その後 人々は、手を取り合い 国を復興していく。生き残った人々は、大切な人達の分まで 時間を全うすることを選んだのだ。皆で助け合い 支え合っていくことを……。

傷ついた 心を癒す為には、生きる希望が必要になる。だからこそ 人々は、どんなに心が折れそうなのがあっても あの時の絶望を胸に 生き延びることを選んだ。

英雄である ディアスや彼を支えた 者達を中心に グランティアは、英気を取り戻す。新たな命の誕生は、後に残る 希望の鍵であり 宝。そんな小さな希望を守る為に 人々は、更に 活気付いていった。

ディアスは、共に戦った とある女性を妃にする。彼女は、魔女によって滅ぼされた 小国の生き残りである 王女。そして 婚姻を結んですぐ 世継ぎを生み 帝国は、更に繁栄していった。

グランティアが、新たな成り立ちを得たことで 周辺諸国も、少しずつ 立て直されていく。『魔』への恐怖は、希望によって 打ち砕くことが出来る と わかったからこそ 人々は、諦めない。

それから 数百年後。

魔女や魔術師によって 滅ぼされた 世界は、完全に復活し 繁栄が続いていた。

新たな応募伴侶に選ばれたのは、貴族でも どこぞの姫君でもない。ただの薬師。けれど 彼女への民達の支持は、王を凌ぐ。なぜなら 彼女は、民達にとって 救世主のような存在だから。隠れ住んで

いた 魔女の放った 疫病の呪を、打ち破ったのだ。

この功績は、隣国にも知れ渡っており 知らぬ者はいない。

当代の王は、彼女に対し 猛烈な求愛を行って やつとのこと
で 妃に迎え入れたそうだと。そして 彼女以外には、伴侶を必要とせず
後宮を取り壊した。

最初は、色々 文句を言っていた 貴族達だったが 世継ぎを産み
更には、皇子と皇女を1人ずつ産み落としたことで 文句を言う
者は、いなくなる。誰もが、優秀で 大人顔負けの意見を言う 子
供達だったからだ。

そして 更に 王妃は、小さな命を、お腹に宿していた。

光の誕生2

その日は、美しい満月の夜……光り輝く 聖なる 瞬間だった。
悲鳴のような声が、辺り一体に響き渡ると 生命の誕生を意味する
産声が、反響していく。

静まり返っていた 城は、次の瞬間 割れんばかりの歓声が、響き渡った。

新たな命……新たな王族の誕生だ。王の血筋が、生れ落ちたことで 国は、更に 繁栄を深めていくだろう。

民達が、息を呑みながら その時を待っていると 王が、白い布に包まれた 小さなものを抱きかかえて バルコニーに現れた。その傍らには、嬉しそうに それを覗き込もうとしている 皇子達や皇女の姿が。

「皇女の誕生だッ！光の皇女。王妃と同じ 髪を持つ 王族が誕生した」

王の言葉に 皆は、歓声を上げる。幼い王族達は、同じように 声を張り上げているようだ。

小さな姫君は、その声に驚いてしまったのか 泣き出す。その声に 女官達は、彼女を王から受け取り バルコニーから消える。

白い布から見えた 髪の毛は、まだ 生え揃っているわけではなかったが 確かに 王妃と同じ 金色を纏っていた。

この日は、まだ 夜だというのに 人々は、闇を恐れない。光が、誕生したことで 恐れることを、忘れてしまったのだ。誰もが、この時を喜び合い 歓喜に満ちている。

けれど 誰も、知らなかった。同じ日……この同じ瞬間に 同じく 王の血を受け継ぐ生命が、誕生していたことを。闇を纏い 紅い目を持った 娘が、この世界に誕生したことを。その命を産み落とされたのが、世界が忌み嫌う 魔女であることも この時 人々は、気付くことはなかった。

これから先に起こる 悲劇も、彼らは、知らない。大切な存在を、簡単に 失ってしまうという 恐ろしさを、知らずに その存在を知らなかったのだ。たとえ 知っていたとしても 対処できるのかは、別として……。

そして 光の王妃は、その数日後 突然 亡くなってしまった。赤子である 我が子を守る為 その身を犠牲にしてしまったらしい。人々は、嘆き 悲しむ。そして 早くに 母を亡くす事になってしまった 末の姫君の先の未来にあるであろう 幸せを願う。そして最愛の伴侶を失ってしまった 王の幸せも。

その後 貴族達が、新たな王妃を迎えるように進言するが その願いは、実現されなかった。王は、生涯 亡くなってしまった 王妃だけを思い続けると誓っていたのだから。

忍び寄る手

グランティア

帝国では、人々が 活気付いていた。なぜなら 今日、皇女の10歳の誕生日だから。民達は、この日を心から喜び お祭り騒いだ。悲劇の中で生き残った 皇女の行く末が、誰もが 心配していたことなのだから。

隣国からは、様々な献上品が贈られてくる。それに伴い 人の出入りも激しくなっていた。なので 警備も、強化されている。

ただ 一部の国民にとって困ることは、山に広がる 畑が、通り道にされてしまったり 畑の作物などを、勝手に 食べ荒されてしまうことだった。旗から見れば それらは、ただの雑草にしか見えないのだから。

「母さんッ！また 畑が、荒らされていたわ？本当に ひどい人達ばかりよね？」少女は、桑を片手に 言う。

少女は、頬を膨らませながら 地団太を踏んでいる。

「フイー………あんまり 大きな声で言うものじゃないわ？今日は、皇女様のお誕生日なのだから。みんな 意気だっているのよ」

母の言葉に 少女は、肩をすくめるだけ。何やら 納得できないようだ。

「それでも こっちは、生活がかかっているのよ？それなのに 丹精込めて育てた 作物を、一瞬にして 駄目にしてしまうことは、許されると思っているの？

皇女様の為だからって 何をしてもいいだなんて 間違っているわ？」

フィーは、そう言って 棚の上に飾っている 木で出来た 人形を見つめた。それは、荒削りな部分が目立っているものの フィーに似せてある。似ていて 当たり前だ。これは、あらゆる災難から 主人を守る為に作られた 身代わりを務める為の人形なのだから。この国では、古くからの慣習で 子供が、10歳の誕生日を迎えると 人形を親から与えられる。早ければ この年から 親元を離れて 働きに出なければならぬ。なので 奉公先での危険が、子供に降りかからないように 親は、子供に 災難を代わりに受けてくれる 人形を渡す。これは、どんなに 人こんな家庭でも、必ず作るものだ。

「だけど 不公平にも、程があると思うの」少女は、溜息をつきながら 呟いた。

母は、それを聞きながら 苦笑してしまっている。

「わたしも、今日が 誕生日なのに 皇女様のような豪華なプレゼントは、ないのよね？ あるのは、この木のお人形だけなんだもの」「あら いらぬのなら 返してもらおうけど？ 折角 仕事の合間を縫って 作ったのにねえ？ 仕方がないか……」誰が、いらぬって 言ったあ？」

フィーは、急いで 人形を抱きしめた。それこそ 我が子を守る母親のように。

「それは、身代わりの人形なんだから 大事にしなくても いいのよ？」

「だけど お友達のような存在になるでしょう？わたしに危機が迫ったら 守ってくれる。その代わり 普段は、わたしが この子を守るのよ。何かをしてもらうんだから 何かで返さないと。それこそ 恩を、仇で返すことになっちゃうじゃない？

だから わたしは、この子を大切にするの。これから一生 一緒にいる存在なんだもの」

フィーは、嬉しそうに 微笑んだ。その様子に 母は、どこか 悲しげな表情を浮かべている。フィーが、不思議そうに首を傾げていると 外の扉が、激しく叩かれた。

忍び寄る手2

「中にいるのは、わかっている。早く 扉を開けるのじゃ」

その声は、老人のようだった。けれど どこか 威厳があるように思える。フィーが、母に視線を向けてみると 彼女は、顔を真っ青にさせてしまっていた。不思議に思っていると 扉は、無理やりこじ開けられた。どうやら 兵士が、一緒にいるらしい。

「ちょっと 人の家を、無理やり壊すだなんて 最低なことをするのね？ 畑を荒らすだけじゃなくて そんな事が、許されているの？」
フィーは、押し入ってきた 人物に向かって 怒鳴った。

「フィー……止めなさい。何も 言っては、駄目よ」

母は、そんな娘の様子に 必死で 止めている。けれど フィーは、言葉をとめない。

「身なりからして 貴族様のようですね わたし達にだって 生活があるんです。彼方方が、帝国の為 王様を支えていることは、知っています。けれど わたし達だって 帝国のひごを得る代わりに 穀物を育てて 献上しているんです。それなのに その為の場所を、壊してしまうんですか？」

10歳の少女の発言に 老人は、目を見開いたようだったが 母に視線を向けて 唸り声を上げた。

「そなたは、自分が何をしたのか わかっておるのか？ 亡き王妃様のことを 忘れたとでも？」

「滅相ありませんッ！けれど この子は………」「黙るのじゃッ！
そなたのした事は、国の危機を招くことやもしれぬのだぞ？」

老人は、何かに 怒り狂っている。母は、そのことに対して 何か
言い訳をしているようだ。

フィーには、訳がわからない。母は、なぜ こんなにも 必死にな
っているのだろうか？

「この娘の存在が、これから先 どうなるのか 理解 出来ないとい
うのか？それ以前 王妃様に対して 何をしたのかも。忘れたと
は、言わせんぞ？そなたは、あの方付の女官だったではないか……
…」

「忘れません………忘れようようがありません。ですが 宰相様
お聞きくださいッ！」

母は、そう言って 宰相と呼んだ 老人に縋り付いた。けれど そ
の手は、簡単に 撥ね退けられてしまう。母は、その反動で 柵に
体をぶつけ そのまま 倒れこんでしまう。

フィーは、悲鳴のような声を上げて 母に駆け寄る。そして 老人
を、睨み付けた。そんな少女の様子に 老人の後ろに控えている
兵士達が、怯んだように見える。宰相は、そんな彼らの反応を横目
に 呆れ返っているようだ。

「まだ 子供なのだから 魔視は、出来ん。それくらいで 怯むで
ない」老人は、フィーを見ながら 言い放つ。

「さつきから 一体 何がしたいんですか？母が、何をしたと？そ
れに 『魔視』？」

確かに わたしの目は、忌み嫌われる色かもしれないけれど 何の
力も持っていないんですよ？それなのに………侮辱にも、程があり
ます。いくら わたし達が、平民だからって 言っている事と、悪

「いことがあります」

フィーは、理解できず 目を細める。そんな少女の様子に 老人は、鼻で笑った。

「何も知らないと？ 無知は、罪だ。」

そなたは、『魔子』……魔女の産み落とした 世界の敵。闇を纏うは、『魔』の印。10年前 王妃様の命を奪った 魔女の娘だ」

出逢い

フィーは、それを聞いて 何がなんだか わからなかった。目の前の老人は、一体 何を言っているのだろうか？兵士達も、何を恐れているのだろうか？どうして 母は、何も 言ってくれないのだろうか？

フィーは、頭が混乱してきて 木の人形を握り締めたまま 小屋を飛び出した。背後からは、宰相の慌てた声と兵士達の、追いかけてくる 足音が聞こえてくる。けれど 少女は、止まらない。母の鳴咽の混じった ” 逃げ切って…… ” という 声が届いたからだけではない。

しばらく 走っていると いつもは、訪れることのない 川辺へと出た。水の流れる音が、少しずつ フィーの心を落ち着かせてくれる。水の中を覗き込んでいると 命の音が、耳に届く。魚の飛び跳ねる音……鳥の鳴き声……風の吹く音などだ。

「わたしは、一体 何者なの？本当に 魔子なの？」フィーは、水に映る 自分を見つめながら 呟いた。

その声は、震えている。体も、小刻みに震えていた。怖い……真実を知ることが。だって あの老人の言っていたことが、本当ならば 自分は、帝国だけでなく この世界の嫌われ者だということなのだから。この帝国で 今でも 愛されている 王妃。彼女の死んだ原因は、当時こそ 誰もが口噤んでいたが 秘密とは、どこからか 流れてしまうもの。なので 国民は、誰でも知っている。なぜ あんなにも 帝王は、魔を憎むのかも……。

けれど 詳しい経緯は、知らなかった。王妃の命を奪った 魔女の

子の存在……。それが、明るみになっていけば どうなってしまうか。悪くて 罅り殺されるか 良くて、死ぬことも許されず その報いを受けなければならぬだろう。

フィーは、水辺に移る 自分の容姿を見つめた。

黒い瞳に 黒い髪……。それは、確かに この世界で忌み嫌われるもの。これまでも 人に会う度に 心無い言葉を耳にすることもあった。蔑むような視線を向けられることも。

けれど フィーは、希望を捨てなかった。なぜなら 一緒に自分を慰めてくれた 母がいたから。そして 一部だが 闇を纏う者としてではなく 1人の友人として 仲間だと認めてくれる 友人もいたからだ。

けれど 自分は、世界が憎まれ木存在……。帝国の光を、奪った存在の血筋だっただなんて。

フィーは、悲しくて仕方がなかった。確かに 自分が、『魔子』だということとは、戸惑いを隠せなかったかもしれない。けれど それよりも ショックだったことは、ある。それは、母と血が繋がっていなかったことだ。物心がついた時から 実の母だと信じて疑わなかった存在が 実は、国に隠れて 自分を育てていた。これは、間違ひなく 罪に問われることだろう。自分は、『魔子』なのだから。もしも その事で 母が、罰せられてしまったら どうしよう。フィーの頭の中では、心配が 風船のように 膨らんでくる。

「何を泣いているんだ」突然 背後から 声が聞こえてきた。

振り返ってみると そこには、見知らぬ 少年が、立っている。

出逢い2

フィーは、その少年の姿に 驚きを隠せなかった。なぜなら 彼は、血だらけになっていたから。けれど 怪我をしている様子は、見られない。彼の血では、ないのだろうか？まさか 恐ろしいことに 巻き込まれてしまうのではないか？

考えれば 考えるほど 不安は、込み上げてくる。先程 知ってしまった真実のこともあるが フィーは、誰かを信じることが恐ろしくて仕方がなかった。信じて 裏切られてしまう 心を痛みを知ってしまったから。

顔を真っ青にさせている フィーの様子に 少年は、自分の姿を見やり 何か 納得した顔をしている。

「どうか 怖がらないでくれ」少年は、優しい声で 言った。

その声は、とても澄んでいて 心を和ませてくれるような響きを持っている。フィーが、頷き返すと 少年は、ホッとしたように 胸を撫で下ろす。

年齢は、フィーと同じか 少し 年上くらいだろう。血で汚れてしまっているが その身なりは、どこかの貴族なのかもしれない。

「僕は、リオンだ。ちょっと 事情があって 身分を明かすことは、出来ない。けれど 断じて 君を害する者ではない。それだけは、信じてほしい」

リオンは、そう言って 頭を下げる。フィーは、そんな彼の様子に 驚きながら 首を振った。

「わたしなんか 頭を下げないでください。あなたは、どこかの

貴族の方なのでしょう？わたしは、しがない 山の民です。それに
この外見は、あなたのような高貴な方の前に晒すべきではない
忌むべき存在です」

「そんなの 君が、望んでのことではないだろう？『魔』を纏って
いるから 全てが、悪ではない。魔術師や魔女の中には、人との共
存を望む者もいるのだから。」

現に 僕の乳母は、魔子だ。だが 謙虚な部分はあるが 清い心が、
闇の部分の照らしているぞ？」

「あなたは、帝国の貴族ではないのですか？」フィーは、目を見開
きながら 聞く。

「まあな？隣国に者だ。皇女の生誕パーティに招待されて……」

リオンは、どこか 溜息をつきながら 呟いた。

どうやら 自分の意思で 帝国を訪れたわけでは、ないようだ。犬
が拗ねているような顔をしているので フィーは、思わず 笑って
しまう。リオンは、そんな彼女の様子に 頬を膨らませ 更に フ
イーの笑いは、止まらない。

「やっと 笑ったな？」

「え？」

リオンの言葉に フィーは、首を傾げた。

「笑っている方が、ずっと いい。僕は、好きだ」

その言葉に フィーは、顔に熱が集まってくるのを感じる。見たわ
けではないが 顔は、真っ赤になってしまっているだろう。体も、
フワフワとしてくる。

不思議な感覚に支配されていたので フィーは、リオンが、近づい
てきていることに気が付かなかった。そして 視線の中に捕らえた

時 唇に 暖かい官職が触れたかと思うと すぐに 離れる。固ま
っている リオンも、少し 顔を赤らめているようだった。
フィーは、何かなんだかわからず 駆け出す。元来た道を、戻って
いく。

※※※※※

「お前は、こんなところで 何をしている？途中で 山賊に襲われたという報告を受けて やって来てみれば……。まあ 山賊どもは、傷は深いが 命に別状はない。お前の容赦ない 剣筋を受けて よく 生きていると感心した。

だが 俺達が色々な対処をしている中 お前は、白昼堂々 女の子をナンパしていたのかよ」

その声に 少年；リオンは、振り返った。相手は、声だけでわかっているが ちゃんと 確認しないで 痛い目に遭うのは、嫌だったから。現に 振り返るのと同時に 左に逸れたのは、正解だった。そのまま 突っ立っていたら 間違はなく 拳骨を落とされていただろう。

相手は、自分の従者だが 本当の兄弟のように育った 乳母兄弟。まるで 遠慮というものを知らないのだ。甘やかされて育った 自分にとっては、唯一 本当の自分という存在を見ってくれる人物なので 離すつもりはないのだが。

「ナンパじゃないよ？女の子が、泣いていたから 励ましていただけ。本当は、あのまま 宮に連れて帰りたいけどね？すっごく可愛らしい子だったもん」

その言葉に 乳母兄は、眉根を寄せている。

「ここは、帝国領土だ。いくらなんでも 好き勝手できるものじゃないぞ？」

今回だって 皇女の生誕パーティの出席者として 足を踏み入れることを許された身なのだからな？ 本当は、俺が同行することは 許されないのに」

「ジュノは、ただの先祖がえりだろ？ さっきの子だって 先祖がえりさ。魔を憎む グランティア王も、先祖がえりも 殲滅は、しななさ。それこそ 世界中の全ての存在を消さないといけないことになってしまふんだから」 リオンは、苦笑しながら 言う。

その言葉に ジュノは、何も言わない。けれど 小さく 肩をすくめてしまっているようだ。

「帝国は、2つに1つの考えしか持っていない。魔は、全て 悪だと決め付けている。中には、違う存在だっているのに そのことを、知ろうともしないんだ。

平穏を望み ひっそりと 暮らしているほとんどの魔女や魔術師は、争いごとを嫌っているのに。なのに 無理やり 引き出されて 殺されてしまふんだ」

「母は、別に 国を恨んじやいませんよ。確かに 救おうとしたのに それを信じてもらえず 祖母は、処刑されてしまったかもしれないけど あなたのお父上は、ちゃんと 信じてくれた。

だから 俺達は、今 こうして生きていられるんだから」

「うん……だからこそ あの子にも、希望を持っていてほしいんだ」

リオンの言葉に ジュノは、微笑んだ。

「ならば 自分の立場を利用すればいいじゃないですか リオン王子。」

今回の皇女の生誕パーティは、伴侶を決めるもの。確固たる 足場を固めるには、持って来いの場です。あんな王妃のお子だからと言って 好き勝手なことをする 独裁者を王にするわけには、いかないのですから」

「ああ わかっているさ。必ず ソフィリア皇女の目に止まってみせるさ。それが、今の状況を打開する 最善の方法なんだから」

リオンは、そう言って 手をかざした。すると 血にぬれた 衣服は、嘘のように 綺麗になる。

出逢い・3

フィーは、走っていた。あの少年のことを考えると 顔が熱くなる。唇に指を持っていて なぞってみた。そして あの感触を思い出してしまい 更に 熱を感じる。

けれど 目の前の光景を目にして その感情は、一気に 消え去った。なぜなら 小屋の前で 母が、今にも 首を撥ねられそうになっているのだから。いつの間にか 小屋には、宰相と呼ばれた 老人や兵士達だけではなく 煌びやかな衣服を着ている 重圧的な雰囲気を持った 男の人が、いる。

フィーは、剣が振り翳されたのを見て 悲鳴のような声を上げた。その声に 一同は、少女へと視線を向ける。中心の男は、特に その姿を見つけるや否や 憎しみが込められているように思えた。

「どうして?! なぜ 母を殺そうとするんですか? そんなの横暴すぎるじゃありませんかッ!」フィーは、母に抱きつきながら 叫んだ。

男は、その言葉に 鼻で笑う。

「横暴だと? 魔子を育てることは、この国で 禁忌だ。それを許せると思えるか?

しかも その魔子の母親は、我が妃の命を奪った 憎き魔女だ。お前が 母と呼んでいるこの女は、元々 妃の友人だった。それなのに 友人を殺した 魔女の娘を育てる等 狂気の沙汰だ」

突きつけられる 言葉に フィーは、悲しくて仕方がない。特に

男の氷のような目を見ていると 心が痛み出す。これは、罪悪感からくるものなのだろうか？

目の前に立っている 男は、この帝国の王……。国のトップだ。彼が宣言すれば この国で生きていくことは、出来ない。それだけじゃない……。他の国への影響力もあるのだから 生き延びることとは、叶わないだろう。

「ならば わたしを罰せばいいじゃないですか。憎い 相手が、目の前にいるんです。好きなように扱えばいい」フィーは、言う。

その言葉に その場にいる 者達は、驚いたように 目を見開く。ただ 王と宰相だけは、思案するような顔をしている。母は、目に涙を溜めて 今まで育ててきた 少女を抱きしめていた。

「わかった お前の命は、我のモノだ。勝手に死ぬことも、許さない。妻を死に追いやった 報いを、忌むべき母親に代わって 受けてもらおう。

サーシャ……。私の視界から 消えろ。お前は、罰さない。だが お前は、自分のしたことを後悔しながら 残された 時を進め」王は、兵士に 目で合図しながら 命じた。

サーシャは、命令されら 兵士によって 連行されていく。母は、悲しそうに フィーに視線を向ける。少女は、母に向かって ニッコリと 微笑んだ。

「大丈夫だから 安心して？ 母さん……。今まで 育ててくれてありがとう。体には、気をつけて？ この人形は、絶対 大切にすることから」フィーは、木の人形を掲げて 言い放つ。

娘の言葉に サーシャは、嗚咽を漏らしている。

「白々しい 別れの言葉は、必要ないだろう？ さあ さっさと歩け」

王は、そう言って フィーの腕をつかむ。

「お前には、我が娘の身代わりを務めてもらう。魔子なのだから
その身体能力を生かすべきだろう？」

こうして フィーは、王宮へと連れて行かれた。皇女の人形になる
ために…………。

人形

フィーが連れてこられたのは、王宮の奥にあった寂れた塔だった。兵士達は、その間 無言で 目も合わせようとしない。おそらく 目が合った瞬間 呪い殺されてしまう と思っっているのかもしれない。確かに 自分達が語り聞く 『魔』とは、恐ろしい力を持っているのだから。

けれど 自分には、そんな力 ない。あるといえば 人より 傷の治りが早いことや自然の流れを予知することが出来るだけだ。でも そんな事 山の民の間では、造作もないこと。傷の治りが早いのは、幼い頃から 薬草を口にしてるからであり 自然の流れを読むことは、山に住んでいれば 嫌でも 身に付く。

中には、もっと 神秘的な力を持っている者も、いるのだ。けれど その力は、公にすることは出来ない。なぜなら この帝国では、普通ではない力は、『魔』と同等だったから。王妃を失った悲しみは、国中に広がって 『魔』への憎しみは、増える一方、中には、古くから 国に存在していた 部族までも迫害されてしまうことも。山を通る 集団の噂話によれば 隣国では、1人の側室が古来からの部族の出身で 『魔』を疑われ 最近 処刑されたらしい。彼女には、息子が1人いて 現在 複雑な立場に立たされているとか。彼の他には、王妃の子がいるそうだが 王は、処刑された 側室の子供を世継ぎにしたがっているそうだ。なので 隣国では、世継ぎ戦争が勃発しているらしい。

他の国でも、魔の殲滅の名の元 侵略が多く行われ 見えない部分で 世界は、荒れてきている。このままでは、いけない。けれど どうすることも、出来ないのだ。それだけ 魔への恐怖は、今でも 人の心の奥底に 眠っているのだから。

案内された 塔の中は、殺伐としていた。一応 日常生活に欠かせないものは、全て 揃えられているようだ。

「今日から お前には、ここで 生活してもらう。死なれては、困るので 食事は、与える。身の回りのことは、自分で出来るな？ 一応 侍女と護衛は、1人ずつ つける。だが それだけだ。それ以外 余計なことは、するな」

その声は、とても 冷たい。フィーは、何も言わず 頷いた。自分には、何かをする権利がないことくらい 理解できているのだから。フィーの無言の返事を見やり 王は、小さく 鼻を鳴らす。

「お前は、我が娘の身代わりでしかない。あの子は、今日で 10歳となる。古くからの慣習に従い 全ての悪意の的になる 人形になるんだ。それが お前の生きる価値となるだろう」

人形と聞いて フィーは、少しだけ 体を震わせた。けれど 次には、何事もなかったかのように 平然としている。そんな少女の様子に 宰相は、黙り込んだままだ。

「陛下……………このお2人が、わたしについて下さる方々ですか？」
フィーは、宰相の隣で 固まっている 自分と年の変わらない 少女と青年を見つめた。

その言葉を受けて 2人は、顔を真っ青にさせてしまっているようだ。青年と少女の後ろには、身なりの良い 少年が、自分をじっと見つめているようだったが 彼は、どう考えても 誰かを仕えさせる側であり 誰かに仕えろとすれば 王族以外にはありえないだろう。それだけ 身分がありそうな姿なのだから。

「ああ そうだ。マリとその兄のアリ。マリは、まだ 幼いから王宮で働くことが出来ない。アリは、騎士見習いだったが 馬車に轢かれて 騎士職につけなくなった。2人は、孤児だから 働かなければならない。だから お前の世話を任せることにした。期待は、持つべきではないぞ？この2人は、魔女に家族を殺されている。だから お前には、同情など 抱かないのだから」

王の言葉に フィーは、2人に視線を向けた。兄は、敵を見るかのように 少女を睨み 妹は、恐怖で顔を引きつらせている。

「これから よろしく願います。何も知らず 迷惑をかけてしまうことも、あるかもしれませんけど お手を煩わせるつもりは、ありませんから」フィーは、頭を下げながら 言った。

それを聞いて 兄妹は、呆氣に取られてしまっているようだ。陛下と宰相も、目を見開いている。

「陛下……わたしは、与えたてた 政務を全うします。ですから 母には、手を出さないでください。それから わたしのことで 誰かを、罰しないでください」フィーは、真剣な表情を浮かべて言う。

予想外な言葉だったので 王は、何も言えなかった。まさか 魔女の娘の口から 自分以外の誰かを救うための言葉が出てくるのだなんて。

「わたしの生きる権利は、陛下の手の中にあります。けれど それ以外の人達は、陛下の道具じゃない。だから それだけは、約束してください。

わたしは、教養もなく 常識も知らない。山の民として育って 母

に守られてきた。だから これまでの庇護への恩を返したい。でも わたしは、自分で行動を起こすことが出来ない。だから これだけは、陛下のお力が必要なんです。

『魔子』である わたしの願いを叶えるなど 拒絶したいかもしれませんけど これだけは、お願いします」

フィーの言葉に 王は、苦悶の表情を浮かべながらも 承諾した。その少女の顔は、どうしても 直視できなかったから。どうしても 早く この場を出ていきたくったのだ。

「さすがと言うべきですか……あの娘には、驚きました。確かに あの魔女に似ているようでしたけれど……」塔を出て 青年が、口を開いた。

そんな彼の言葉に 宰相は、息を呑んだ。王は、何も言わないで 青年の言葉を待っている様子。

「まさか あそこまで 似ているとは。若かりし頃の陛下と同じ考えを持っておられたと 亡くなった 父から聞いたことがあります。勿論 僕は、覚えていますよ？あの時の光景もね？魔女の声も、言葉も……忘れたことがない。あんなにまで 悲観した声は、よほどのことがない限り……」

「何が言いたい？あの魔女は、怪しい術を使って 俺に近づいた。まして……我が子の命を狙い 結果としては、我妻の命を奪ったのだぞ？」

「けれど その報いまで あのような小さな器に受け継がせるのですか？

確かに あの子は、他の同世代の子供に比べれば 聡い。さすが 貴方の子です。魔子であることだけを重視しておりましたが 良き

王族の部分も、受け継がれているようでしたから。でも だからと言って…… 「黙れッ！」 王の声が、塔の聳え立つ 庭の一角に響く。

「どうってことない。あの娘は、ただの人形だ。姫の身代わりを務める 人形。それ以外の何者でもない」

王は、そう言って これ以上の発言を許さなかった。宰相と青年は、顔を見合わせて 黙る他ない。

自己紹介

塔の部屋の中に残された フィーは、もう一度 マリとアリを見た。2人は、その視線を感じて 何かに震えているようだ。フィーとしては、そんなにも 恐れられていることは、悲しくて仕方がない。今日まで 自分は、普通の子供のように育っていたのだから。

「恨むことは、悪いことじゃないよ。だって そうでもしないと生きて道元力には、ならないんだもんね？」

フィーの言葉に 兄妹は、驚いたような顔をしている。けれど 少女の表情を見て ハッとしたらしい。

「ごめんね？わたしは、何にも知らずに 育ってきた。本当なら許されるべきじゃない存在なのに 当たり前のように暮らしてきただなんて……………」

他の魔子達は、処刑されているのに わたしだけ 恵まれた環境にいたんだもの」フィーは、悲しげに 呟く。

その言葉に アリは、眉根を寄せる。

「同情とは、目上に位置する人が、自分よりも下の者にするものだ。アンタに同情されるほど 俺達は、不幸じゃない。

確かに 両親は、魔女によって 殺されている。だが それだけのことだ。アンタには、関係のないことだろうがな？アンタは、所詮 皇女様の命を守る 人形でしかないんだから。感情は、不必要だ」

アリの口調には、棘がある。けれど それは、あの王とは違って
まだ 温かみがあるように思えた。そのことを考えると 自然と
笑みがこぼれてくる。

「おい…………何を笑っているんだよ。気持ちが悪い」

兄の物言いに 妹のマリは、顔を真っ青にさせているが フィーは、
全く 傷ついているようには、見えない。そんな少女の様子に 2
人は、呆氣に取られてしまっているようだ。

「気を悪くさせちゃったのなら ごめんね？わたし…………あなたが、
優しいなと思って」

アリは、フィーの言葉に 驚きを隠せていない。フィーは、そんな
彼の反応に苦笑しながら 話を続ける。

「親切に教えてくれて ありがとう。別に これは、嫌味なんかじ
やないのよ。本当に思ったことなんだから。

あなたは、わたしに 怒りを込めてはいたけど 教えてくれたでし
ょう？別に 教えなくても あなたは、困らないのに」フィーは、
ニコニコしながら 言う。

「あたし あなたの事を勘違いしてました」ずっと 黙ったままの
マリが、口を開いた。

妹の様子に アリは、少し神妙な様子だ。けれど すぐに フィー
に視線を向ける。

「あなたは、王妃様の命を奪い 皇女様を脅かした 魔女の子。そして 陛下が、この世で最も 憎んでいる存在です。でも 今 あなたの言葉を聞いてから 不思議でなりません。

あなたが、本当に 心が魔に染まっている存在なのか」

「それかどうかは、わたしでも わかんないなあ？だって わたしは、この10年間 先祖がえりだと思って 育ってきたんだもの。母さんのことも、本当の母だと思っていたし。別に 不思議にも思っていないかったんだもの。

うちに 宰相様がいらっしやって 初めて 知ったばかりなの。あまりに ショックだったから 小屋を飛び出してしまったのよね？」

フィーの言葉に 兄妹は、顔を見合わせている。

「だったら どうして……お前は、ここに来た？すぐにでも 逃げ出すチャンスは、あったんだろう？怪我をしている様子は、ないから 連行されたわけじゃないんだろう？」

「母を見逃してもらう代わりに わたし自身が、王についてきたの。小屋に戻ってきた時 母は、処刑されそうになっていたの。

帝国では、わたしという魔子を育てたことが重罪かもしれないけど わたしにとっては、たった1人のお母さんだったから。それだけが、わたしの願いなんだ。

王様に向かって 申し出ること自体 いけないことかもしれないけどね？」フィーは、肩をすくめるように 笑う。

「母さん 無事に 生き延びてくれるといいなあ？もう 会えないけど それだけが、わたしにとっての願いだから」

「たとえば 自分が、どうなってしまうても それは、構わないということがあるか？」

「ええ そうよ。だって わたしの産みの母は、王妃様の命を奪った存在なんでしょう？その報いを子供である わたしが受けるのは、当然のことなんじゃないの？だからこそ わたしは、皇女様の身代

わりのお人形になるんだから。

それが、わたしの生きる価値に繋がるんだもの」

アリとマリは、それを信じて疑わない 少女に 戸惑いを隠せなかった。

「改めて よろしくね？ わたしは、フィー。ただのフィーよ。ああ……名前を言っても、呼ぶ環境がないんじゃない？ 意味がないよね？」
フィーは、から笑いしながら 呟く。

「いや……他の方々の前では、名を呼ぶべきじゃないが 3人だけの時は、名を呼ばしてもらおう。

俺の名前は、アリだ。家名は、既に 消えうせているから 同じく ただのアリだな？ お前の護衛をすることになっている」

「あたしは、マリです。フィー様。あなたの身の回りのお世話をさせて頂くことになっています。どうか よろしくお願いします」

フィーは、アリとマリの様子に 目を輝かせる。2人も、少し照れながら 頷いた。

運命の時

フィーが、塔に住むようになってから 数年が経った。子供だったフィーも、大人になりかけの少女へと成長している。闇を纏うと 畏怖されている 黒髪は、随分 伸びて 今では、少しまとめなければ 歩くたび 引きずる事になってしまふほどだ。なので マリは、プロの髪結士顔負けだろう。毎日のように フィーの長い髪のを結い上げてくれるのだから。

「我が妹ながら 本当に尊敬するよ。お化けのような髪から 女神を作り出すんだから」アリは、紅茶をすすりながら 呟く。

その言葉に フィーは、眉根を寄せた。『お化け』という単語に 反応したのだ。その様子が更に笑いを生んだのか アリは、笑っている。マリは、兄の発言に呆れ果ててしまっているらしい。

「兄さんってば あんまり フィーを苛めると 無視されてしまうわよ？前に 1週間も口を聞いてもらえなくなってしまうって 泣いて謝った事 忘れたの？あの時は、本当に困ったんだから」

マリの言葉に アリは、肩をすくめる。

「悪かった フィー。だから………無視だけは、止めてくれよ。あの時は、本当に寂しかったんだからな？

他の騎士の連中には、変な目で見られるし 本当に地獄のような日々だったんだ」

アリの懸命な様子に フィーは、ふんぞり返って ”許してあげる

”と 微笑んだ。その様子に 護衛の青年は、嬉しそうに 笑う。
兄のホツとした 様子に マリも苦笑気味だ。

時間をかけて やっと 落ち着いてきた 環境。最初は、不安なこともあったが 今のフィーは、この兄妹がいるお陰で 幸せだった。

「本当に 兄さんってば いつの間にか フィーを実の妹以上に可愛がっているんだから。変な誤解を生むような噂だけは、起きないように心がけてね？ じゃないと フィーへの偏見が、更に酷くなってしまうんだから。それでなくても 兄さんの女癖の悪さは、酷いんだから。

少女から既婚者に未亡人にまで その魔の手は、どこまで 伸びるのか って 王宮中の噂なのよ？ 兄さんの相手の女性とフィーが、同等に扱われるだなんて 許せることじゃないわ？ いくら 事情があったとしても」マリは、フィーと自分の分の紅茶の用意をしながら 言う。

妹の容赦ない 一言に アリは、ショックを受けている。なぜなら 顔が真っ青になってしまっているから。その様子に フィーは、思わず 苦笑してしまう。 主にまで 笑われてしまい アリは、その場にうな垂れている。その様子は、まるで 元気をなくした犬のよう。尻尾の幻覚まで 見えてしまいそうな光景に 2人の少女は、笑い合う。

そうして 運命の時は、刻々と訪れる。まさか こんな事になってしまうなんて 誰が、予想できただろうか？ おそらく 誰も、わからなかっただろう。誰も、ありえない事 だと思っていたのだから。

運命の時2

フィーは、着慣れない ドレスに身を包み 壁の花になっていた。目の前には、煌びやかな世界が、広がっている。塔の上に住むようになってから 一度も 足を踏み入れたことがない別世界だ。一生縁がないと思っていたのに……。

そう 今夜は、帝国の宝である 皇女の生誕パーティ。帝国に住まう 貴族は、勿論のこと 隣国や同盟国からも、貴族や王族が招待されている。フィーは、そんな中 人々の冷たい視線を受けながら その光景を見つめていた。まさか 自分が、こんなパーティに足を踏み入れることになるだなんて 思いもしなかった。けれど 有無を言わさなかった 王は、適当なドレスを届けさせて 時間になれば 強制的に連行されてしまったのだから。

初めて このお城に連れて来られた時も、皇女の生誕パーティだった。けれど フィーが 招待されることなど 一度もなく 今回が初めてのこと。一体 どのような可能性を考えてのことなのだろうか？

マリの聞いた 侍女達の噂によれば 今夜の主役である ソフィリア皇女の婚約発表が、正式に発表されることになっているらしい。その最有力候補は、帝国と古くからの同盟を結んでいる 織物などの盛んな国だそう。けれど 皇女の求めている相手は、隣国の小国の第二王子らしい。互いの意に沿うよう 様々な人々が暗躍するパーティだから フィーが、呼ばれることになったのだろう。万が一 危険に晒されても 身代わりになれるように。それが、本来 自分に与えられた 役割なんだから。

——ちよっと ごらんになって？——

――まあ よくも出席しているものだわ？――
――帝王陛下が、お許しになったのかしら？――

――噂は、本当だったのか――

――噂？一体 どんな――

――魔法の娘が、実は生き残っていたという話だ。それで 王は、娘を奥の塔に幽閉している っていう……――

出席者達のヒソヒソとした 声は、嫌でも耳に届く。耳が良すぎるのも、問題なのかもしれない。相手は、聞かれても問題ないのかもしれないけれど 一応 帝王の招待を受けている フィーへの侮辱は、公にするべきではないのだから。それをわかっていて 王は、知らん振りをしているのかもしれないけれど。

会場には、今 フィーの味方になってくれる 人は、いない。みんな 汚いものを見るかのように 着飾った 少女を見つめている。好奇の目 侮蔑の目の中には、まるで 舐め回すような嫌な視線も含まれているようだ。

フィーは、孤独と戦いながら 時間が経つのを待っている。これが終われば また 塔の中に戻ることが出来るのだから。あの部屋にいる間が、限られた フィーにとっての自由な時間。たった 2人しかないけれど 心を許せる 友が舞ってくれているのだ。

このパーティーの会場には、フィーの居場所など 存在していない。なぜなら 王や他の王子と皇女は、勿論の事 主役である ソフィリア皇女も、憎しみを込めた視線を向けているのだから。帝国の王族達が、明らかに このような態度を取っているのだから 誰も、声をかけるはずがない。

フィーも、そのことをわかっているから あえて 輪の中に入ろうとしなかった。水を差すつもりは、一切 ないのだから。自分は、ただの身代わり……。人形は、ただ そこに存在しているだけ。だから それ以外は、何もすべきではない。

これが、フィーにとっての償いの方法なのだから……

運命の時3

パーティーも、終盤を迎えようとしていた。フィーは、始まってからずっと 壁の花のまま。勿論 許しがあるまで 退出するとは、許されない。勝手に塔に帰ることは、叶わないのだ。だから 平和に催しが終わるのを、待つしかない。

でも さすがに フィーは、喉が渴いてしまった。この会場に入ってから 食事の乗っている テーブルには、近づいていない。万が一 変な誤解をされたくないのだから。だから 当然の事ながら パーティーが始まってから 何も口にしていないのだ。

目の前には、談笑しながら 軽いデザートを手にしたリ ダンスしている 貴族の子息・令嬢達が、固まっている。皇女の婚約発表は、一番最後らしいから みんな 色々と自分の意見を主張し合っているのだろう。

「うーん………まだ パーティーは、終わらないのかな？」 フィーは、溜息をつきながら 呟いた。

その声は、普通ならば 誰にも 聞こえないはず。なぜなら 囁くように小さかったのだから。まさか 誰かに 聞かれているだなんて 思いもしなかった。

「ずっと そこから 離れないつもりか？」

「え?!」 フィーは、驚きのあまり 飛び上がってしまう。

「すまない………驚かせてしまったようだな? すまなかった」

振り返ってみると そこには、苦笑気味の青年が 立っている。フ

イーは、その姿を見て 昔 1度だけ出会った 少年を思い出す。
目の前にいる 青年は、それだけ 彼に似ているように思えたのだから。

目の前にいるのは、あの少年よりも年上で 更に 洗礼された 貴族の令息に見える。蜂蜜色の髪は、シャンデリアの明かりで 更に 煌びやかに輝いているようだ。

「いいえ……そんな事 ありません。わたしの方こそ お見苦しいところを、お見せしてしまつて……」

フィーが、そう言いながら 頭を下げる。すると 何かが、髪の毛に触れたような気がした。驚いて 顔を上げてみると 青年の顔が、目の前に……。至近距離だったので フィーは、思わず 盛大な音を立てながら 転んでしまう。

その音は、その場に響き渡り 一同の視線が、フィーと青年に向けられた。この時 特に ソフィリア皇女の視線が鋭かったことに フィーは、気が付かない。なぜなら それどころでは、なかったから。

「本当に……すまなかつたな？ そんなにまで 驚かれてしまうだなんて。それにしても 綺麗な髪だな？ 乳母だった 女性も、君と 同じ髪の色をしていたんだが。」

君は、先祖がえりか？ 帝国では、先祖がえりでも 肩身の狭い生活が強いられると聞くが 君の場合は、いい環境にいるんだな？ 皇女のパーティにも出席できるのだから」

何気ない言葉に フィーは、薄く笑うしか出来ない。自分から望んだとは、いえ この環境が、良いのか 判断が出来ないのだから。自分は、ただの身代わりの人形。皇女をあらゆる 危険から守るためだけの。それだけの為 自分は、生かされている。

黙り込んでいる フィーに 青年は、不思議そうに 首を傾げていた。けれど そこへ 凜とした 声が、聞こえてくる。

「リオン王子……もうすぐ お父様の発表があります。ですから 壇上まで ご一緒いたしましょう？」

他の方と話されるなんて あたたくしが、おりますのに……酷いことじゃありませんか」

フィーは、その声の主を見て 息を呑む。なぜなら それは、今夜のパーティーの主役である ソフィリア皇女だったからだ。彼女は、青年に声をかけてすぐ フィーを睨みつける。少女は、悟った。――彼が、皇女の婚約者になる 人物だということを。

だから 人々は、自分達を冷たい目で見ていたのだろう。特に 皇女の相手と親しくしていた フィーに。

しかも 青年の名前には、覚えがあった。まさか こんな運命は、あるのだろうか？ フィーは、驚きのあまり その場に座り込んでしまふ。そんな少女の様子に 皇女は、目もくれず リオン王子の手を引いて 貴族達の注目を浴びながら 壇上へと歩いていく。フィーには、皇女の顔が 勝ち誇ったように見える。

壇上の近くにいる 王や王子と姉皇女も、冷たい目つきで フィーを見ていた。感情の籠っていない 様子で……。フィーは、戦慄した。自分は、かかわってはいけない 皇女の大切な人と大勢の人の目の前で 接してしまっていたのだ。

自分は、皇女を守るだけに存在しているのに 危害を害することを、してしまっただなんて……。そんな事を考えながら フィーは、壇上を見つめていた。リオン王子は、ソフィリア皇女に何かを耳元で囁かれ 目を大きく見開きながら 自分を見ている。もしかしたら 自分の出生を聞いたのかもしれない。

正当なる 帝王の娘で 国中から愛される 姫君と魔女の娘であり
更には、王妃を死に追いやった 災厄のような娘。皆 皇女の幸
せを願い 魔子の存在を忌み嫌う。これは、当たり前のことなのだ。

そして そのパーティーにて ソフィリア皇女の婚約者は、隣国
の第二王子である リオンだということが、帝国はおろか 世界中
に知れ渡った。

訪問者

「何だか フィーの様子がおかしくないか？」アリは、不思議そうな顔をしながら 呟いた。

「あのパーティーから戻ってきてから ずっと あんな感じなの。もしかして あの場で 酷い目にあったのかしら？ 参列者の中には、王妃様に心酔していた 貴族もいたらしいんですもの。」

それに 陛下は、勿論 他の王族方も出席なさっていたみたいだし。酷い言葉を投げかけられたのかもしれないわ」マリも、どこか 心配そうな顔をしている。

2人の視線の先では、塔にある 唯一の窓から外を見つめている少女が……。フィーは、パーティーから戻ってから 様子がおかしい。悲しげな顔をしていたかと思えば 小さく 溜息をついているのだ。まるで それは、恋煩いになっているかのように。けれどアリとマリは、自分達の主が そんな事になっているなど 思いもしていない。その類の話は、したことがないのだから。

フィーにしても まさか 幼い頃に1度だけ 出会った 少年が、皇女の許婚だなんて 思いもしなかった。他国の貴族だとは、思っていたが まさか 王族だっただなんて。

悪戯っ子のような顔立ちには、綺麗な顔の中に潜んでいて 魅力的な男性へと変貌していた。あの時は、血まみれになっていたから 詳しい容姿は、わからなかったけれど 物語に存在している 王子様そのものだ。しかも 本物だったのだから。

あの時に出席する と言っていた パーティーで 彼は、皇女に見初められたんだろう。皇女は、王子に対して 恋する 乙女そのものだったのだから。王子にしても 相手は、帝国の皇女……断る

理由には、ならないはずだ。

「そういえば ソフィリア皇女の婚約者になられた リオン王子は、しばらくの間 城に留まるそうだ。自国では、今回のことで 何かと不穏な動きがあるようだな？」

「でしよねえ？ソフィリア様の相手となったのだから グランティア帝国の後ろ盾を得たと同じこと。第一王子派にしてみれば 厄介なことではかないはず。」

確か リオン王子といえば 乳母の方が、魔子らしいわ？その方の母上は、魔女であるが為に 処刑されてしまったそうだけれど。人々から 慕われた 素晴らしい方だったのよね？」

「王妃様とも面識が、あったらしい。聞いた話では、山で薬師をしていた頃に 助けたとか 助けられたとか、詳しくは、語られていないんだけどな？そのこともあって 迫害は、受けていなかったらしいが 王妃様の死後は、『魔』を恐れる連中を抑える手段が見つからなくて 処刑されることになってしまったそうだ」

「何だか 悲しいことね？」

処刑されてしまったことも、悲しいことだけれど 残された側も、陰口を言われたでしょうし。それに 乳母を務めているのなら 更に 複雑な立場になってしまったはずだもの。

第二王子にしても 不安定な立ち位置になってしまったでしょうし。下手をすれば 世継ぎ争いに巻き込まれて 命を危険に晒してしまう事だって。今回の婚約は、隣国の時期王をめぐる争いという名の齒車を動かせることになったでしょうね？」マリは、溜息をつきながら 言う。

兄妹の話聞きながら フィーは、空を見上げた。

初めて会った時 リオン王子は、何者かに襲われたかのように 血まみれになっていたはず……あれは、もしかしたら 誰かに命を狙われたのかもしれない。

きつと 皇女の婚約者になったことで 助かることもあるはずだ。
ただ フィーが願うのは、ソフィリア皇女とリオン王子の幸せある
未来…………。

その時 塔の扉が、ノックされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2489u/>

身代わりの娘

2011年7月23日13時40分発行